

「中学校における小編成の吹奏楽部活動に 関する研究－編曲の実践と検証－」

岡田 知也, 井上 智司

(音楽教育講座) (大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専修)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Study on Activity of Small Bands in Junior High School :Practice and Inspection of Arrangement

Tomoya OKADA, Satoshi INOUE

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho Takamatsu 760-8522

要 旨 少子化の影響は、学校教育実践の場において様々な影響を及ぼしている。その一例が児童・生徒数の減少に起因した、課外活動に所属する児童・生徒数の減少である。中学校における吹奏楽部の部員数も例外ではなく、多くの吹奏楽部で部員が減少していった。部員数の減少という事象を受け、吹奏楽連盟各支部は主催するコンクールにおいて中学校部門、高等学校部門にそれぞれ小編成の部を新たに設けた。しかし当初は選曲や編曲、演奏表現において不自然な演奏が多く見てとれた。このことは同時に小編成に特化した指導法や演奏曲が未開発であったということの意味する。本研究は中学校における小編成の吹奏楽部において演奏される楽曲に注目して、小編成の吹奏楽の特性を生かした演奏曲を編曲により開発し、検証するものである。

キーワード 中学校, 課外活動, 吹奏楽, 編曲, 小編成

1. はじめに

我が国における少子化傾向は依然として続いている。14歳以下のいわゆる年少人口は、1982(昭和57)年以降減少を続けて、1997(平成9)年には、年少人口割合が65歳以上のいわゆる老年人口割合を下回った(厚生省, 1998)。さらに2004(平成16)年には合計特殊出生率が1.29となり過去最低を更新した(厚生労働省, 2005)。

このような少子化の影響は、学校教育実践の場において様々な影響を及ぼしているといえ

る。その一例が児童・生徒数の減少に起因した、課外活動に所属する児童・生徒数の減少であり、中学校における吹奏楽部の部員数も例外ではない。もちろん生徒数の減少だけをその理由にするのは些か性急といえようが、次の例に見るとおり吹奏楽部員の減少はまぎれもない事実なのである。

和歌山市の中心部を校区とするA中学校は、1990(平成2)年には生徒数574名、吹奏楽部員数43名であった。ところが生徒数の減少に呼応するかのよう吹奏楽部員数も減少していき、以下列举すると、1991(平成3)年は519

名で43名。1992（平成4）年は498名で53名。1993（平成5）年は458名で49名。1994（平成6）年は430名で45名。1995（平成7）年は389名で35名であった。この年までは大編成といえる50人編成の部門に出場している。しかし1996（平成8）年は408名で27名となり、この年以降、後述の小編成部門に出場している。以後、1997（平成9）年は409名で26名。1998（平成10）年は431名で22名。1999（平成11）年は407名で31名。2000（平成12）年は394名で26名である。本研究を開始した2001（平成13）年以降も部員数の増減に大きな変化は見られず、30名前後で推移している。以下、部員数のみを列挙すると、2001（平成13）年は35名。2002（平成14）年は30名。2003（平成15）年は29名である。

以上に述べたような部員数の減少という事象を受け、関西吹奏楽連盟は1991（平成3）年度より⁽¹⁾、中国吹奏楽連盟は2000（平成12）年度より、主催する吹奏楽コンクールにおいて、中学校部門、高等学校部門にそれぞれ小編成の部を新たに設けた。両部門は従来50名以内を編成参加人員としており、少人数による編成ではコンクールという場において不利は免れなかったのである。少人数であるにもかかわらず素晴らしい音楽を聴かせてくれる団体もあったが、概して人数の不利を補うため、あるいは大編成の団体と互角に競うため、選曲や編曲、演奏表現において相当の無理をしているように見てとれた。学校教育の一環でありながら、一方、音楽を審査されるコンクールのまさに弊害であったといえよう。このような状況の中、30名以内を編成参加人員とする小編成の部が設けられたのである。

2. 研究の方法

本小論は、主に文献研究、編曲による楽曲開発とアンケートによる調査及びその分析・考察により構成される。岡田が1. はじめに、2. 研究の方法、4. これまでの研究の経過、5. 小編成のための編曲の実践、6. アンケート調査の集計結果及び分析のうち、「③その他 お

気付きの点があれば自由にお書き下さい」、④部活動を指導・運営することにおいて、部員数が少ないことでの利点、もしくは悩みや困っていることがありましたらお聞かせ下さい」の分析、7. 考察、8. 今後の課題を担当し、井上が3. 小編成の定義と具体的編成例、6. アンケート調査の集計結果及び分析のうち、回答の集計及び①選曲について、②編曲について、の分析を担当した。

アンケートによる調査に関する詳細は以下の通りである。

(1) 調査対象者及び調査方法：本稿の「5. 小編成のための編曲の実践」において述べる編曲作品を、吹奏楽コンクールの自由曲として取り組んだ中学校2校の吹奏楽部及び顧問教員を調査対象者とする。文中では2校をA中学校、B中学校と表記する。

アンケート調査は調査対象者に電子メールの添付ファイルで調査用紙を送信し、記名回答を依頼した。また必要に応じて直接面接法による調査も行った。

(2) 調査時期：平成17年10月

(3) 調査内容：設問は5段階尺度による選択肢によるものと記述式によるものがある。内容は①選曲について、②編曲について、③選曲・編曲について顧問教員の自由記述、④部員が少ない部活動の指導・運営について顧問教員の自由記述、の4部分により構成されている。

(4) 分析及び考察について：今回は紙面の都合上、アンケート調査の「④部員が少ない部活動の指導・運営について顧問教員の自由記述」の回答内容に基づく、分析及び考察は行わないこととする。

(5) 本小論における凡例は以下の通りとする。アンケート調査の質問事項を文中に引用する際は斜体文字で表記する。

アンケート調査の回答選択肢を文中に引用する際は「 」で、回答の具体的記述内容を文中に引用する際は『 』で、さらに曲名は〈 〉でくくることとする。

3. 小編成の定義と具体的編成例

(1) 吹奏楽コンクールの規定による定義

現在、全日本吹奏楽連盟の四国支部、九州支部を除く全国9支部が、それぞれ主催する吹奏楽コンクール支部大会において小編成に限定した部門を実施している。各支部のコンクール実施規定による小編成部門の定員は以下の通りである。北海道支部B編成35名・C編成25名、東北支部25名、東関東（茨城、神奈川、栃木、千葉）支部35名、西関東（埼玉、山梨、群馬、新潟）支部30名、東京支部B編成35名・C編成20名、北陸（富山、石川、福井）支部30名、東海（長野、静岡、岐阜、愛知、三重）支部30名、関西支部30名、中国支部30名と規定されている。小編成を20名と規定している支部が1、25名が2、30名が5、35名が3である。このように、定員を30名とする支部が5と最も多く、このことから吹奏楽コンクールの実施規定を論拠とした場合、小編成とは「概ね30名程度による編成」と定義されよう。

(2) 全日本吹奏楽連盟の公募要項による定義

全日本吹奏楽連盟が公募を行っていた「小編成バンドのためのアレンジ作品」の公募要項⁽²⁾には、基準として25名程度での編成が示されている（実際にはパート名が記されており、人数は推定した）。このことから全日本吹奏楽連盟の公募要項を論拠とした場合、小編成とは「概ね25名程度による編成」と定義されよう。この編成例では、ホルンやトロンボーンは各2名とし3人目（ホルンは3、4人目）をオプションとしている。またオーボエ、ファゴット、ストリング・ベース等はオプションとし、打楽器は3名以内とするなどの特徴が見られる。各パートの人数を削り、一般的でないと考えられている楽器を用いないようにすることは教育的配慮によるものと考えられるが、そのことは一方で機能面での制約を余儀なくされる恐れがある。さらには次章において詳細に述べることとなるが、小編成に特化した編曲作品にとどまらず、

吹奏楽全般における編曲作品が備えるべき指針として「吹奏楽が備えている特性、例えば管弦楽には用いられていない楽器の音色、多彩な打楽器群等を活用する」ことを岡田は提言している（岡田、2004）。このことを作品において実体化するためには、打楽器が3名以内という設定は、少ないと考えられる。

(3) 主な作・編曲者の編曲事例にみる定義

我が国の吹奏楽界において精力的に自作品を発表し、あるいは編曲活動を行っている3名について文献を調査したところ、伊藤康英は22名（伊藤、1996）、佐藤敦は23名（佐藤、1998）、後藤洋は25名（後藤、1988）での編成例をそれぞれ提言している。このことから、作・編曲活動を専門に実践している者は、それぞれ独自の理論に基づき、あるいは作品を演奏する団体の実態に合わせて編成を決定しているといえ、これらの事例により、一概に編成を定義づけることは困難であった。これらに対し岡田は30名による編成を提言している⁽³⁾。その編成の内訳は次の通りである。

F1 2 (Pic 含む), Ob 1, Fg 1, EbCl 1, BbCl 6, BCl 1, Asx 2, Tsx 1, Bsx 1 の木管楽器計16名。

Tp 3, Hr 2, Tb 2, Euph 1, Tub 1, SB 1, Perc 4 の金管楽器と打楽器計14名。合計は30名である。

この編成案で興味深いのは、小編成の場合、先述の全日本吹奏楽連盟の公募要項においてもそうであったように、通常、直ちに除外されがちなオーボエ、ファゴット、Ebクラリネット、ストリング・ベースを残し、加えて打楽器も4人を確保している点である。これは、小編成は人数が少ないだけであって、その機能面においてはむしろアドバンテージとなる可能性もあるとの考えのもと、小編成においても、トゥッティの音色や、個々の楽器の音色の色彩感の変化を可能にするための提言であると考えられる。

具体的な技法としては、

- 1) オーボエを編成に加えることにより、吹奏楽における音色を、色彩感豊かなものとする事が可能となる。
 - 2) 中音部において3声体の和声を構築する際、2本のホルンにファゴットを加えることにより、ホルンが少ないことによるデメリットを補う。
 - 3) Ebクラリネットを用いることにより、クラリネット群またはフルートによるユニゾンの演奏に明確な輪郭を持たせることができる。
 - 4) ストリング・ベースによるピチカート奏法が使用可能となる。
 - 5) 先述の指針にもある通り、打楽器群を活用することができる。オーボエと同様に吹奏楽における音色を、色彩感豊かなものとする事が可能となる。
- 等が考えられる。

(4) 本研究における小編成の定義

前述した岡田の編成に加えられているオーボエやファゴットは、その他の管楽器に比べ技術の習得が困難であるといわれているのに加え、楽器の整備にも比較的手間を要するとされる。小編成で活動している多くの吹奏楽部が、これらの楽器を敬遠する理由のひとつはここにあると考えられる。また、30人程度の編成の場合、オーボエやファゴットは各1名を配置するのが限界で、そのため上級生から下級生への技術指導ができないという指導面の難しさも考えられる。しかし前述したように、小編成特有の機能を生かし、その可能性を最大限に広げるために、ぜひ編成に含めたいところである。

本研究においては、岡田が提言している30名による編成を小編成の原則的な定義と捉え、編曲等を行う際は、これに沿うこととする。しかし活動実践の場における様々な編成の実態に対応することも必要であることを念頭に置いて、以下の27名の編成でも演奏が可能となるよう極力配慮することとする。

Fl 2 (Pic 含む), Ob 1, Fg 1, BbCl 6, BCl 1, Asx 1, Tsx 1, Bsx 1 の木管楽器

計14名。

Tp 2, Hr 2, Tb 2, Euph 1, Tub 1, SB 1, Perc 4 の金管楽器と打楽器計13名。合計は27名である。

その上で、人数の実態、各パートのレベルや全体のバランスを考え、Ebクラリネットを加えたり、アルトサクソフォン、トランペットを増員したりすることで、より充実したサウンドが得られると考えられる。

先行研究における編成例を視野に入れつつ、本研究においては小編成を以下のように捉えていくこととする。すなわち「原則として30名による編成」が本研究における小編成の定義である。しかし編曲する際は、実践する学校の状況に応じて、可能な限り27~29名の編成でも演奏ができるように配慮していきたい。

4. これまでの研究の経過

小編成の吹奏楽においては、その特性を生かした選曲、編曲が不可欠である。吹奏楽コンクールの自由曲として取り組まれる曲は、吹奏楽のためのオリジナル作品、もしくは管弦楽曲等からの編曲作品である。我が国で演奏されるオリジナル作品は、アメリカの作曲家によるものが多く、大編成から小編成まで様々な編成用のものがある。しかし小編成用の作品は、教育的な配慮からか技術的に平易で、音楽の魅力に乏しい、いわゆる「入門用」とされるものが多い。近年は日本人作曲家によるオリジナル作品も多くとり上げられているが、小編成による演奏を意図したものは皆無である。

一方、編曲作品をみると、後期ロマン派、印象派、近・現代の管弦楽作品を原曲とするものが多く見られる。もともとが3管編成や4管編成の管弦楽のための作品がほとんどであるから、その編曲はすべからく大編成用となる。しかも原曲の響きの再現は、弦楽器群を持たない吹奏楽では望むべくもない。

このことから筆者が考える、小編成での演奏に適している作品は、

1. ピアノ, ヴァイオリン, オルガン等, 器楽独奏のための作品
 2. 弦楽四重奏, ピアノ連弾等, 同族楽器によるアンサンブル作品
 3. ヴィラ = ロボス (Villa-Lobos, Heitor 1887-1959) やピアソラ (Piazzolla, Astor 1921-1992) の作品等, 一般的な管弦楽とは楽器編成が異なるもの。等を原曲として,
 - ア. 吹奏楽が備えている特性, 例えば管弦楽には用いられていない楽器の音色, 多彩な打楽器群等を活用する。
 - イ. 原曲を忠実に再現しようとするのではなく, 吹奏楽のための作品として, 新たな役割を担うものとする。
- 等の指針に基づき編曲されたものであることが望ましいと考えている (岡田, 2004)。

5. 小編成のための編曲の実践

前章において述べた指針に基づき, 平成13年度より毎年1作品ずつ, 小編成の吹奏楽部活動に特化した楽曲を編曲により開発した。開発した編曲作品は以下の3作品である。

平成13年度

ヴィラ = ロボス 〈ブラジル風バツハ第2番〉より 〈アリア〉, 〈トッカータ〉⁽⁴⁾

作曲者が指定した本楽曲の編成は, 通常の木管楽器各1に加え, テナー及びバリトンサクソフォン各1, ホルン2, トロンボーン1, 弦楽5部, ピアノ, チェレスタ, 打楽器群である。特に打楽器群には, Chocalhos, Ganzà, Reco-reco等の民族的な打楽器が指定されている。管弦楽の通常の編成と比較するとかなり小規模であり, さらには通常は管弦楽では用いられず, 吹奏楽において活用されるサクソフォンが重要な役割を担っている。以上のことから, 本楽曲は先述の3に該当し, 上記ア, イの2つの指針を満たすものであると考えられる。

平成14年度

ドヴォルジャーク (Dvořák, Antonín) 〈スラヴ舞曲集第2集〉より 〈op.72-3〉, 〈op.72-5〉

スラヴ舞曲集は第1集 (op.46) 8曲, 第2集 (op.72) 8曲の16曲で構成されている。この作品はもともとピアノ連弾曲として作曲され, 後に作曲者自身によりオーケストレーションされた。管弦楽版の編成は一般的な2管編成であるが, 筆者はこの作品を本来のピアノ連弾曲として捉え, 先述の2に該当すると考え, 特に指針イを拠り所として編曲を行った。また第2集 (op.72) 8曲のうち第3番と第5番を選んだ理由は, この2曲が指針アを最も満たすことができると思ったからである。

平成15年度

サン = サーンズ (Saint-Saëns, Camille) 〈動物の謝肉祭〉より 〈化石〉, 〈白鳥〉, 〈終曲〉

作曲者が指定した本楽曲の編成は, 弦楽5重奏, ピアノ2台, チェレスタ, 木琴である。管楽器は曲により使用される楽器が異なる。例えば 〈化石〉ではクラリネット1, 〈白鳥〉では管楽器は用いられず, 2台のピアノとチェロの3名のみで演奏される。〈終曲〉ではピッコロ1, クラリネット1が用いられるのみである。この作品も管弦楽の通常の編成と比較するとかなり小規模であり, さらには通常管弦楽では用いられないピアノが活用されている。以上のことから, 本楽曲は先述の1及び3に該当し, 上記ア, イの2つの指針を満たすものであると考えられる。

これらの編曲作品を, 各年度の吹奏楽コンクールの自由曲として2校の中学校の吹奏楽部に取り組みを依頼した。A中学校は関西支部に所属する公立中学校で各学年2~3学級の小規模校である。B中学校は四国支部に所属する国立大学 (当時) 教育学部の附属中学校で各学年3学級の小規模校である。

6. アンケート調査の集計結果及び分析

(1) アンケート調査の内容

アンケート調査の調査項目は次の通りである。

1. 選曲について

(1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか

- a) 技術 (全体及び各パートについて)
- b) 表現, 理解 (中学生, 指導者にとって)

(2) この音楽が小編成バンドに適していると思われませんか

- a) 楽器編成
- b) 小編成で演奏する楽曲として

(3) 選曲について自由にお書き下さい。

2. 編曲について

(1) 演奏, 指導上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

(2) 編成上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

(3) 編曲について自由にお書き下さい。

3. その他 お気付きの点があれば自由にお書き下さい

4. 部活動を指導・運営することにおいて, 部員数が少ないことでの利点, もしくは悩みや困っていることがありましたらお聞かせ下さい。

(2) 集計結果及び分析

〔表1〕は・1. 選曲について (1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか a) 技術 (全体及び各パートについて) の回答及び集計結果である。また〔表2〕は編曲作品毎の回答分布を集計したものである。

〔表1〕

1. 選曲について

(1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか

a) 技術 (全体及び各パートについて) 5 : 難しい 4 : やや難しい 3 : 適当 2 : やや易しい 1 : 易しい

A中学校	全体	Fl.	Ob.	Fg.	Cl.	Sax.	Tp.	Hr.	Tb.	Eup.	Tub.	S.B.	Per.
ブラジル風パッサリム アリア	3	3	2	2	2	4	3	3	3	4	2	4	2
トッカータ	4	3	3	3	4	3	3	4	3	3	3	3	4
スラヴ舞曲 op.72-3	3	4	3	3	3	3	2	2	1	2	2	2	2
op.72-5	3	4	4	4	3	3	2	3	2	3	3	4	3
動物の謝肉祭 化石	3	3	3	3	4	3	4	3	3	3	4	4	4
白鳥	4	4	4	3	3	2	2	5	1	2	2	2	4
終曲	4	4	4	3	4	4	3	2	2	3	2	4	3

B中学校	全体	Fl.	Ob.	Fg.	Cl.	Sax.	Tp.	Hr.	Tb.	Eup.	Tub.	S.B.	Per.
ブラジル風パッサリム アリア	3	3	4	3	3	3	3	3	4	4	2	2	2
トッカータ	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
スラヴ舞曲 op.72-3	3	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3
op.72-5	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
動物の謝肉祭 化石	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
白鳥	2	4	2	2	2	2	2	4	2	2	2	2	4
終曲	3	4	4	4	5	5	3	3	3	3	3	3	3

〔表2〕 回答の分布集計

A中学校	5	4	3	2	1
ブラジル風バッハ アリア	0	3	4	5	0
トッカータ	0	3	9	0	0
スラヴ舞曲 op.72-3	0	1	4	6	1
op.72-5	0	4	6	2	0
動物の謝肉祭 化石	0	5	7	0	0
白鳥	1	3	2	5	1
終曲	0	5	4	3	0

B中学校	5	4	3	2	1
ブラジル風バッハ アリア	0	3	6	3	0
トッカータ	0	1	1	1	0
スラヴ舞曲 op.72-3	0	4	8	0	0
op.72-5	0	0	1	2	0
動物の謝肉祭 化石	0	0	1	2	0
白鳥	0	3	0	9	0
終曲	2	3	7	0	0

〔表1〕, 〔表2〕をみると, 全体を通して「3: 適当」との回答が最も多く, いずれの曲も, 技術面で中学生が取り組むのにふさわしい曲であるという回答が寄せられている。

A中学校とB中学校を比較して, 同じ項目の回答で2ポイント以上の差があったのは, 〈ブラジル風バッハ第2番アリア〉のオーボエとス

トリング・ベース, および〈動物の謝肉祭 白鳥〉の全体である。また, 〈スラヴ舞曲op.72-3〉の各パートの回答においては, A中学校は「2: やや易しい」が圧倒的に多いのに対して, B中学校では「3: 適当」や「4: やや難しい」が多く, 他の曲と比較して, 回答内容に開きが見られる。これは第一に, この楽曲にはフルートやクラリネット等, 木管楽器に独奏の場面が含まれている。小編成による演奏は大編成による演奏と比較して, 生徒一人ひとりの音や表現が合奏音に表れやすく, 演奏において独奏を担当する生徒の力量の差が指導者の印象, ひいては回答に反映された結果であると考えられる。第二に, B中学校がこの楽曲に取り組んだ年は, 金管楽器の各パートは1年生に頼らざるを得ない状況であった。そのため同じ楽曲ではあるが, 担当する生徒の楽器経験年数による力量の差が, 回答結果に反映されたものと考えられる。

〔表3〕は 1. 選曲について (1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか b) 表現, 理解 (中学生, 指導者にとって) の回答及び集計結

〔表3〕

b) 表現, 理解 (中学生, 指導者にとって) 5: 難しい 4: やや難しい 3: 適当 2: やや易しい 1: 易しい

A中学校		メロディ	ハーモニー	リズム	音楽の構成
ブラジル風バッハ アリア	中学生	4	5	4	5
	指導者	4	5	3	4
トッカータ	中学生	4	3	5	4
	指導者	3	3	5	4
スラヴ舞曲 op.72-3	中学生	3	3	3	3
	指導者	3	3	3	3
op.72-5	中学生	3	3	3	3
	指導者	3	3	3	3
動物の謝肉祭 化石	中学生	3	3	3	3
	指導者	3	3	3	3
白鳥	中学生	4	3	3	4
	指導者	3	3	3	4
終曲	中学生	4	3	5	3
	指導者	3	3	3	3

B中学校		メロディ	ハーモニー	リズム	音楽の構成
ブラジル風バッハ アリア	中学生	3	3	4	3
	指導者	3	3	4	3
トッカータ	中学生	4	4	5	4
	指導者	4	4	4	4
スラヴ舞曲 op.72-3	中学生	2	2	2	2
	指導者	2	2	2	2
op.72-5	中学生	3	2	3	3
	指導者	3	2	3	3
動物の謝肉祭 化石	中学生	3	3	3	3
	指導者	3	3	3	3
白鳥	中学生	2	2	2	2
	指導者	2	2	2	2
終曲	中学生	2	2	2	2
	指導者	2	2	2	2

果である。

〔表3〕を見ると、〈スラヴ舞曲〉及び〈動物の謝肉祭〉においては、中学生、指導者双方にとって「2：やや易しい」、「3：適当」との回答が多数を占めており、表現や理解の上でも中学生に適した楽曲であると言えるであろう。

〈ブラジル風バッハ第2番〉では、ハーモニーやリズムに「5：難しい」という回答が見られた。ハーモニーの要素に関しては、作曲者は〈アリア〉において機能和声の理論に縛られない自由な和声の手法を用いており、このことと関連すると考えられる。例えば6th, 7th, 9th等、音が付加された和音や、非和声音の処理に現代的な手法がうかがえる。リズムの要素に関しては、〈トッカータ〉は機関車が走る様子を描写した音楽であり、冒頭、機関車が動き始める描写において用いられているリズムが「5：難しい」との回答に結びついたものと考えられる。

また、〈動物の謝肉祭 終曲〉のリズムについては、A中学校では「5：難しい」に対して、B中学校では「2：やや易しい」と差が見られた。これは〈動物の謝肉祭 終曲〉では、16分音符の速い動きや8分音符による後打ちのリズムなどが頻出するためであると考えられる。難易度の受け取り方の差異には、前述のような生徒一人ひとりの音が合奏音に表れやすいという小編成の特性や、日常の基礎的な練習への取り

組み、演奏楽曲のジャンル等による得意、不得意が関係するものと考えられる。

〔表4〕は（2）この音楽が小編成バンドに適していると思われませんか a) 楽器編成 の回答及び集計結果、〔表5〕は b) 小編成で演奏する楽曲としての回答及び集計結果である。〔表6〕は（3）選曲について自由にお書き下さい。に寄せられた自由記述回答を列記したものである。

〔表4〕

（2）この音楽が小編成バンドに適していると思われませんか

a) 楽器編成

5：適している 4：やや適している 3：どちらとも言えない 2：やや適していない 1：適していない

A中学校

ブラジル風バッハ アリア	5
トッカータ	5
スラヴ舞曲 op.72-3	4
op.72-5	4
動物の謝肉祭 化石	5
白鳥	4
終曲	4

B中学校

ブラジル風バッハ アリア	5
トッカータ	5
スラヴ舞曲 op.72-3	4
op.72-5	4
動物の謝肉祭 化石	3
白鳥	4
終曲	4

B中学校

ブラジル風 バッハ アリア	5
トッカータ	5
スラヴ舞曲 op.72-3	5
op.72-5	4
動物の謝肉祭 化石	3
白鳥	2
終曲	4

〔表5〕

b) 小編成で演奏する楽曲として

5: 適している 4: やや適している 3: どちらとも言えない 2: やや適していない 1: 適していない

A中学校

ブラジル風バッハ アリア	5
トッカータ	5
スラヴ舞曲 op.72-3	4
op.72-5	4
動物の謝肉祭 化石	5
白鳥	3
終曲	4

〔表4〕及び〔表5〕を見ると、〈ブラジル風バッハ第2番〉は、両中学校のすべての項目において「5: 適している」、また〈スラヴ舞曲〉は「4: やや適している」と「5: 適している」で占められており、いずれも小編成での演奏に適した楽曲であると評価されているといえるであろう。また「3. 小編成の定義と具体的編成例」の「(4) 本研究における小編成の定義」において提言を行った、楽器編成に関しても適切であると評価されているといえよう。

〈動物の謝肉祭〉においては、〈化石〉〈終曲〉は「4: やや適している」と「5: 適している」が多数であり、小編成の吹奏楽で表現しやすい

〔表6〕

(3) 選曲について自由にお書き下さい。

A中学校

ブラジル風バッハ アリア	この曲らしい響きを出すのが大変でした。
トッカータ	楽しい曲。とても吹奏楽で演奏できそうでないのにできた。
スラヴ舞曲 op.72-3	特になし
op.72-5	特になし
動物の謝肉祭 化石	もともと小さな編成の曲だから、小編成の吹奏楽で表現しやすいと思います。
白鳥	有名すぎる曲だけに、どうまとめるか心配だった。
終曲	特になし

B中学校

ブラジル風バッハ アリア	特になし
トッカータ	メロディそのものはとらえやすく、背景のリズムやハーモニーは難しかったが、分かりやすく、少人数でもさまざまな工夫が可能だった。
スラヴ舞曲 op.72-3	特になし
op.72-5	メロディが分かりやすく、構成もメリハリがあり、少人数でやるのには効果的だと思う。
動物の謝肉祭 化石	特になし
白鳥	もともとチェロ独奏のイメージがあるので、どうしてもそちらのオリジナルのものが簡潔で美しく完成されているものだけに、難しいと思った。
終曲	特になし

との回答を得られた。

しかし〈白鳥〉は、「小編成で演奏する曲として」の項目については、A中学校は「3：どちらとも言えない」、B中学校は「2：やや適していない」との回答であった。このことに関して、自由記述の回答に理由を見ることが出来る。

〈白鳥〉は、優美な白鳥の姿を描いた旋律を、チェロの独奏が奏でる非常に有名な曲であるが、本編曲では、そのチェロの旋律をホルンを始めとして、様々な楽器がフレーズを分担して奏する。〔表6〕を見ると、これに関して『斬新な発想で面白かった』という声がある一方、『もともとチェロ独奏のイメージがあり、そちらのオリジナルのものが簡潔で美しく完成されているものだけに難しいと思った』という意見

が見られる。そのため吹奏楽のための新たな作品として表現するのが難しかったようである。このように、原曲の印象が強く支配する楽曲については、吹奏楽で新たな表現を構築するのは難しいと考えられ、選曲の際、慎重に検討する必要があるといえる。

〔表7〕は 2. 編曲について (1) 演奏、指導上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。に寄せられた自由記述回答を、〔表8〕は (2) 編成上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。に寄せられた自由記述回答を、〔表9〕は (3) 編曲について自由にお書き下さい。に寄せられた自由記述回答をそれぞれ列記したものである。

〔表7〕

2. 編曲について

(1) 演奏、指導上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

ブラジル風バッハ アリア	和音のバランスがわかりにくい。難しい。
トッカータ	始めと終わりのリズムが大変難しい。苦勞しました。
スラヴ舞曲 op.72-3	あまり思い出せないのですが、特に問題はなかったと思います。
op.72-5	特になし。演奏しやすかったと思います。
動物の謝肉祭 化石	特になし
白鳥	ピアノをピブラフォンとフルートに分割して演奏させるのに苦勞した。リズムをそろえにくいし、バランスも問題だった。
終曲	16分音符の速い部分が大変でした。かなりスピードを上げないと曲にならないが、ヴァイオリンの速さを真似るのは大変でした。8分音符の後打ちもリズムをとるのが難しかった。

〔表8〕

(2) 編成上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

ブラジル風バッハ アリア	特になし
トッカータ	特殊打楽器が必要、曲の雰囲気大切にするために。
スラヴ舞曲 op.72-3	特になし
op.72-5	特になし
動物の謝肉祭 化石	特になし
白鳥	特になし
終曲	特になし

〔表9〕

(3) 編曲について自由にお書き下さい。

ブラジル風バツハ アリア	特になし
トッカータ	クラリネットのフラッタータンギングにはびっくりしました。生徒は喜んでやっていました。
スラヴ舞曲 op.72-3	木管中心の曲で、金管、打楽器はややひまな曲でした。全体の響きは雰囲気が出せたと思っています。
op.72-5	旋律を受け持つ楽器によっては、音量の差が大きくなるので配慮が必要だと思う。
動物の謝肉祭 化石	特になし
白鳥	白鳥のメロディをホルンにもってくるのは、奇抜な発想で面白かった。このとき、ホルンはかなり吹ける生徒がいたのでなんとかなったが、そうでなかったらかなり厳しい編曲です。
終曲	特になし

〔表7〕、〔表8〕及び〔表9〕の自由記述においては、まず〈ブラジル風バツハ第2番〉では、ハーモニーやリズムが難しいとの回答が見られた。これらは、前述したような作曲者の現代的な作曲技法によるものと考えられる。また、前述したような特殊な打楽器の使用や、クラリネットの特殊奏法など、様々な表現上の工夫が可能で、取り組みがいのある曲であるとの回答が寄せられている。

〈スラヴ舞曲〉は、部分的に旋律を担当する楽器と伴奏とのバランス調整が難しい箇所があったようであるが、全体としては『演奏しやすかった』との記述に見られるように、小編成での演奏にふさわしい編曲となっていることが分かる。

〈動物の謝肉祭〉の〈白鳥〉は、各ソロを担当する生徒の力量が問われる曲であったようだ。また、原曲のピアノのアルペジオを『ピブラフォンとフルートに分割して演奏させるのに苦労した』との回答が見られた。また〈終曲〉では、速いテンポの中で頻出する16分音符の速い動きや8分音符の後打ちのリズムなどが難しかったようであり、生徒一人ひとりの力量が大きく影響するものとの回答が寄せられている。

7. 考察

今回のアンケート調査をとおして、特記すべき点は以下の4点である。

- (1) 小編成による演奏は大編成による演奏と比較して、生徒一人ひとりの音や表現が合奏音に表れやすいと考えられる。このことは小編成において長所でもあり、短所でもあるといえる。力量を持った生徒の存在が、演奏全体を印象づけることが可能である反面、経験の浅い生徒の音も覆われることなく聴衆の耳に届く。編曲する際には、どのような楽曲を編曲するのかということと同等の意識をもって、誰が取り組むのかということに配慮しなければならないといえよう。
- (2) 通常、演奏する楽曲を選ぶ際、演奏可能であるかどうかを検討する要素として、まず技術的側面に意識が偏ることが多いと思われる。しかし演奏において、表現の側面も重要な要素であることはいうまでもない。ただ取り組むかどうか検討している楽曲が、表現の側面において、指導者や中学生にとって難かしいか易しいかの判断の手がかりをわかりやすく提供する必要があると感じた。
- (3) 今回、編曲を試みた楽曲は前述の指針により選んだ3曲であった。アンケート調査の結果を見ると、この指針に関しては、適切であったと考えられる。また編曲そのものについても、小編成での演奏にふさわし

いものであるとの声をうかがうことができる。しかし〈白鳥〉に関して『もともとチェロ独奏のイメージがあり、オリジナルのものが簡潔で美しく完成されているものだけに（表現が）難しいと思った』という回答が見られた。このことから、原曲の印象が強く支配する楽曲については、吹奏楽で新たな表現を構築するのは難しいものとして指導者に受け取られることが懸念される。選曲の際、慎重に検討する必要があると考えられる。

- (4) 今回の実践においては編曲が、演奏の完成度に深く関わることができたと考えている。同時に指導者及び生徒の平素の取り組みに関して、重要な示唆を得た。平素の取り組み、すなわちデイリートレーニングが適切に実施されている、ということが背景となってこそ、編曲が活躍の場を得ることになるのはいうまでもない。

8. 今後の課題

本研究の今後の課題として、以下の3点を挙げておきたい。

- (1) 今回、2校の実践のデータにより分析・考察を行った。今後、実践例を増やし、継続して検証を行い、得られたデータを楽譜の改訂に生かしていきたい。
- (2) 考察の(3)においても述べたように、提言している選曲の指針により新たに編曲作品を開発する。さらには編曲作品のみならず、実践のデータに基づき自作の楽曲も開発する。
- (3) 今回は紙面の都合により行わなかったアンケート調査の「4. 部活動を指導・運営することにおいて、部員数が少ないことでの利点、もしくは悩みや困っていることがありましたらお聞かせ下さい」の回答内容に基づく分析及び考察を行い、小編成の指導・運営等の実践方法に関して、何らかの提言を行いたい。さらに言えば、それは指

導者同士が共有できる内容であることが望ましいと考えている。

注

- (1) 平成3年8月に開催された第41回関西吹奏楽コンクールのプログラムには、小編成部門を新設した理由を以下のように記している。「(前略)最近では農山村の過疎化、都市のドーナツ化現象、出生率の低下等による生徒数の減少に伴う、少人数・小編成バンドの育成の問題も、連盟の課題として大きく浮上して参りました(以下略)」
- (2) 全日本吹奏楽連盟公式ホームページ (<http://www.ajba.or.jp/>) を参照した。
- (3) ヴィラ・ロボス作曲、岡田知也編曲による“ブラジル風パッサダ第2番”の総譜を参照した。
- (4) 下記の『研究報告芸術作品集Ⅱ第3集』に演奏を収録している。

引用文献

- 伊藤康英「小編成を考える(その3) - 私の小編成論」『教育音楽中学・高校版』音楽之友社、1996.1、p. 82
- 岡田知也「中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究 - Villa-Lobos, H “Bachianas Brasileiras No. 2” の編曲を通して -」『研究報告芸術作品集Ⅱ第3集』香川大学教育学部、2004.3、p. 11-12
- 厚生省編『厚生白書(平成10年版)』ぎょうせい、1998.6、p. 8
- 厚生労働省編『厚生労働白書(平成17年版)』ぎょうせい、2005.8、p. 392
- 後藤洋「編曲法 楽譜の書き換えとレパートリー」『バンドジャーナル別冊ザ・シンフォニックバンド』音楽之友社、1988.6、p. 80
- 佐藤敦「小編成吹奏楽作品の楽器法について」『研究冊子教育現場の吹奏楽第8号』日本吹奏楽学会、1998.5、p. 30